

「カンボジアと私」 篠原勝弘・前大使の講演から Cambodia and I Ambassador Katsuhiro Shinohara

1960年代から一貫してカンボジアの人々と向き合い、外交の現場を歩んできた篠原勝弘・前大使が8月、任期を終えて日本へ帰国した。帰国前の5月30日、シエムリアップのアンコール日本人会（AJA）主催で行われた講演録から、カンボジアへの思い、これからの日本との関係など一部をお届けする。（協力=アンコール日本人会）

Ambassador Katsuhiro Shinohara, who finished his term in August, has been working with the Cambodian people since the 1960s. This is a summary of his speech at the Angkor Japanese Association on May 30, 2009.



講演する篠原勝弘・前大使（AJA提供）

Ambassador Katsuhiro Shinohara

60年代、水浸しのカンボジア

1967年7月、飛行機でカンボジアの上空に差し掛かった時、下を見ると水浸しだった。陸が見えない。いつまでたっても水の中に降りていく。それが私の最初のカンボジア体験だった。外務省から派遣された私の目的は、カンボジア語を勉強して実情を学ぶことだった。まず学校探しを始めたが、大学は協定がなく入れない。初めはホテルのボーイさんから教わっていた。そのうちお寺で勉強するようになり、ウナロム寺院で若いお坊さんから1年間、学んだ。ある日大僧正から「お坊さんになったら」と言われ、10カ月の僧侶生活も送った。

69年に大使館勤務となったが、政変を経て72年に帰国した。その後も状況はますます悪化していったが、91年に和平が成立。よくここまで復旧・復興したと思う。今のカンボジアというのは、長い戦争で破壊され、ほとんどゼロに近い状況からスタートした。外国人の目から見ると、司法制度がきちっとしていないとか、法律を守らないとか、いろいろ不満があると思うが、まずは国民が食べられる状況になることが重要。この18年間でようやく平和な時代となったと思う。

日本の援助、和平への道

日本の援助は、54年にシハヌーク殿下が他国に先駆けて戦時中の賠償請求権の放棄を宣言した英断に答える意味で、賠償に代わる援助を行ったのが最初だ。65年には無償資金協力による「3センター」が誕生。バットマンバン農業センター、コンポンチャムの畜産センター、モンコルボレイの医療センターで、70年の政変までの間、多くの専門家や協力隊が派遣された。支援するだけでなく、

現地の人々に非常にお世話になった。彼らは自分たちの貴重な食料も客人に惜しみなく出す。そうした損得を省みない性格が、日本人に感動を与えていた。

70年から続いた紛争の間、日本は国境などで人道援助を行い、79年にヘンサムリン政権ができてからは国内への援助を本格的に開始した。ベトナム和平会議に参加できなかった日本の中には、是が非でもカンボジアの和平には参加したいという熱い思いがあった。そこで80年代から、和平実現後に復興会議を主催することなどを提案し、これが91年以降、日本が対カンボジア経済協力のイニシアティブをとる伏線になった。

98年のポルポト派の全面帰順後、99年に政治的安定が実現した。外国からの投資が急速に伸び、高度成長が始まっている。これからは都市と地方の格差は正といったバランスのとれた経済発展が必要だ。行政組織がズタズタになり、人材も失われた。社会の根幹をなす人材育成が重要だ。有能な若い人をどんどん育てていく必要がある。10年先、20年先にどういう国づくり、どういう国家を目標とするのかについて国民にははっきり示す必要がある。若い人たちが夢を持てるようなグランドデザインを作って欲しい。

カンボジアの人々とともに

私にとってカンボジアは、青春時代から今日まで多くの時間を過ごしたところ。カンボジアという国とカンボジア人がこよなく好きだから、日本人とこれほど気心が通じ合う国民もほかにあまりないんじゃないかと思う。人を温かく受け入れる。日本の社会に昔あった素朴なところが残っている感じがする。

日本はアジアからは切り離せない。欧

米に見ならい、欧米風の優等生になった日本だが、脱亜入欧が優先し、アジアとのつながりを少しないがしろにしてきたという反省が今ある。アジアの人たちと一緒にやっていくというのが、日本人の基本であり、最も体質にあったものだと私は思う。カンボジア人は日本に対して、ちょっとこそばゆいぐらいに信頼してくれている。それは戦後60年、一人ひとりの日本人がアジア諸国の復興に無私無欲の精神で取り組んできたその結果だ。われわれが勝ち得た信頼感というものを大事に育てていくことが肝要だ。

In July 1967, I came to Cambodia for the first time. The Foreign Ministry sent me here with a mission to learn the Khmer language and get to know the society. But I was not able to study at university here because we did not have an agreement in place. So I learned the language from a porter at the hotel I was staying at. Then, I went to see the temples and studied at Wat Ounalom for one year.

I started to work at the embassy in 1969 and went back to Japan in 1972. After that, the situation in Cambodia got worse but the nation completed a peace agreement in 1991. Eighteen years have passed since then. I think this country has achieved peace finally. Some may think that it is not enough but the nation started from scratch.

In 1954, Prince Sihanouk waived the right to demand compensation from Japan. Japan's Official Development Assistance to Cambodia started in response to this decision. In 1965, Japan established three centers for agriculture, livestock and medical treatment in Cambodia with grant aid. Many experts and the Japan Overseas Cooperation Volunteers were sent to those centers. I remember many of them were impressed with the Cambodian people's warm hospitality.

In 1999, Cambodia achieved political stability. While the economy has developed, the gap between the urban and rural communities has been widening. I think that this country needs to balance and fill that gap. Capacity building of human resources is also necessary. I hope that the leaders of the country will show a grand design for a new nation that stimulates the young people's dreams.

I think that Cambodians and Japanese are like-minded. The warm hospitality of the Cambodian people is what we had left in the past. Japan is a part of Asia. I believe that living with Asian people is most comfortable and suitable for the Japanese. Cambodians overwhelmingly trust Japanese very much. I appreciate it and think that we need to develop it toward the future.